

今年の『新聞週間』は、本社の女性記者のことをお伝えしたい▼この八月に大熊由紀子記者が論説委員になった。すでにたくさん社説を書いている。大げさな表現で恐縮だが、社説百五年の歴史で、女性論説委員の登場ははじめてのことだ▼大熊記者は、東京在勤の科学部時代、大学同期生の水戸支局員と結婚した。夜、有楽町駅前で大根を買い、常磐線で水戸に帰る。翌朝、水戸から出勤するという生活を続けた。いまは高校一年生の母親である▼『自由と自立への歩み』を書いた佐藤洋子記者も子育てには苦労した。「でも、結婚したら社をやめるという風潮が崩れ、次に子どもができたらやめるといふ風潮が崩れ、いまは二番目の子どもを持つ女性記者もでてきました」▼ロス五輪の特派員になった女性記者は、二児の母親だった。一カ月の出張から帰ると、長女はよりしっかりものになり、長男もだいぶ自立していた。「かわいい子にはその母を旅させよ、ですね」と彼女は笑う

▼特別養護老人ホームに住みこみ、下の世話までして体験記を書いたのは、金沢支局の女性記者だ。彼女はアパートにミニファックスをおき、山形支局員の恋人と毎日、交信を続けている▼記者の帰宅は遅い。電話をかけても通じない時が多い。で、好きな時にミニファックスで思いのたけを送っておく。恋が実り、二人は結婚するが、結婚後も別々の支局だろう。ミニファックス交信は当分続く▼体も心も疲れ切って自信を失うことがある。一日三十回、記者をやめようかと考えましたという福島支局のかけ出し記者もいた。母子心中の遺体を目撃するのもしらかった。朝七時前に飛び起き、深夜まで走り回る。警察署で夜勤の巡査と雑談中に居眠りをした。「かわいそうで起こせなかったよ」と巡査にいわれた▼いま、本社には七十人を超える女性記者がいる。社会部、政治部、経済部、外報部、女性記者の活躍する舞台はこの十年で急速に広まった。